

東亜同文書院記念基金会ニュース

第21・22合併号

2019年4月～2021年3月



Contents



- 第26・27回 東亜同文書院記念基金会授賞式 -02
- 東亜同文書院記念基金特別奨励賞・荣誉賞授与 -17
- 本間先生欽慕の会・根津山洲先生墓参・荒尾東方斎先生墓参 -18
- 東亜同文書院大学記念センター活動レポート -21

発行／愛知大学東亜同文書院大学記念センター

第26・27回東亜同文書院記念基金会授賞式

第26・27回東亜同文書院記念基金会授賞式が2021年3月10日、霞山会館にて催されました。

この顕彰事業は、東亜同文書院記念基金会によるものであり、その目的は、東亜同文書院およびその経営母体であった東亜同文会にかかわる研究や調査成果、および啓蒙的活動のうち、顕著な実績を認められた個人、団体や組織を顕彰するものです。東亜同文書院記念基金会を構成する滬友会（書院同窓会。2007年解散）、霞山会、愛知大学東亜同文書院大学記念センターからの推薦により同理事会において選出しており、1993年の第1回表彰以来、本年度で第26・27回目（第26回が新型コロナウイルス蔓延による延期のため、第27回と同時開催）となります。

これまで、書院生の大旅行に関する研究成果や東亜同文会の資料に基づく研究、東亜同文書院や東亜同文会の出版物のデータベース化事業、東亜同文書院生や卒業生による日中交流に関するメディア報道、その他日中交流の活発な活動などの成果に対して顕彰してまいりました。

第26回、記念賞に星博人氏。第27回、記念賞に大城立裕氏が選ばれました。

〔第26回記念賞受賞者〕

星博人氏

総合商社丸紅の中国室長、上海支店長、北京支店長、駐中国総代表代行を歴任され、2000年に退職された後、霞山会常任顧問、翌年には常任理事兼東亜学院の学院長に就任され、2019年6月までの18年間、中国との文化・学術・教育交流の発展に尽力されました。

2004年から2006年にかけて、霞山会と上海交通大学との研究プロジェクト「霞山会と上海交通大学の交流史、現状と今後の発展趨勢に関する学術研究」を愛知大学と立ち上げ、その主な参画者として、東亜同文書院が上海交通大学を借用した事実関係を解明するなど大きな成果を上げられました。

〔第27回記念賞受賞者〕

大城立裕氏

東亜同文書院予科第44期生として入学後、動乱の戦時下での学生生活を余儀なくされ、

学徒出陣にも駆り出される体験をされました。終戦後は上海での戦後処理の仕事に就き書院が接収された時期も体験されました。沖縄帰郷後は、自分のそれまでの体験を小説化して数々の作品を世に送り出し、芥川賞、平林たい子文学賞など、数多くの賞を次々に受賞され、国からも紫綬褒章（1990年）、勲四等旭日小綬章（1996年）を受賞されました。

書院という舞台での諸体験をその後の作家生活の展開の原点とし、戦後以降、沖縄琉球の文化を今日の文化レベルへと発展させた最大の功労者であり、沖縄の人々からも「知の巨人」として絶大な支持を集めるなど偉大な功績を残されました。

〔授賞式挨拶〕

川井伸一氏

（東亜同文書院記念基金会会長）

愛知大学学長）

皆様、こんにちは。東亜同文書院記念基金会会長の川井でございます。本日はコロナ禍の中ではございますけれども、このように予想以上に多くの方々のご参加をいただき大



変ありがたく思っております。どうもありがとうございます。

昨年はコロナの影響で延期ということになりましたが、今年もちよっと先行きが見通せない中で一体どうしようかということでも過日の理事会の場におきまして、感染防止対策を十分にとりつつ対面とオンラインを併用して行うということに相成りました。従いまして、本日は2回の授賞式を合わせて行うというかたちになりました。

まず昨年度、第26回の受賞者は星博人様でございます。後で詳しい推薦の理由につきましてご説明があるかと思いますが、簡単に私からみて特に印象深い点について申し上げます。

まず、第1は、星様の独特なご経歴であります。星様は1937年に中国でお生まれ、その後、中華人民共和国が成立した後も中国に滞在され、1953年に帰国されたということです。日中戦争、戦後の国内の内戦、中

華人民共和国の建国、そういう歴史的経緯を現場でいろいろ間接、直接にご体験されたということですよ。

それから、日本に帰国された後も長年にわたり総合商社丸紅におきまして、特に中国とのビジネス関連を中心に長きにわたってご活躍されたということでございます。

その後、2010年に霞山会に入られまして、常任理事として長きにわたりまして霞山会と中国との間の文化、教育、学術交流の発展に多大な貢献をされたと理解しております。合わせますと、おそらく人生の大部分、70数年にわたりまして中国の現地にお住まいか、あるいは中国との関わりを持たれて活躍されてきたということでございます。以上が第1点でございます。

次に、霞山会では先ほど言いましたように中国との文化、学術交流、教育交流をされたという中で、私の印象に強く残っていることを2つ申し上げたいと思います。1つは先ほどの賞状の中にも記述がございました2004年から3年間にわたって霞山会と上海の交通大学との間で行われた学術の共同研究プロジェクトです。このプロジェクトの目的は霞山会と上海交通大学との間の歴史的な交流関係を探って検証しようというものですが、このプロジェクトの組織化に星様は多大な貢献をされました。かなり日が経ってからですけれども、私はこの共同研究プロジェクトの成果である論文集をちよつと拝見

したことがございます。その中で印象深かったのは、上海にあつた東亜同文書院のすぐ近くに交通大学のキャンパスがございましたが、日中戦時中のきわめて複雑な状況ではありませぬけれども、当時の上海交通大学の校舎の一角を東亜同文書院大学が借用したというような事実を明らかにされたことがございます。

それから、もう1つ印象深かった点は、戦前も含めて東亜同文書院の学生と交通大学の学生との間で直接の交流があつたということが明らかになったことです。これは上海交通大学側の若手研究者が論文の中でそういうことを書いています。以上、星様の学術交流面でのご貢献について紹介させていただきますました。

もう1つは、2019年の6月に霞山会と愛知大学との共催でシンポジウムを本学において開催致しました。これにおいても星様に多大なご支援、ご協力を賜つたということでございます。シンポジウムのテーマは「日中関係の未来図、歴史から考える」というタイトルのもとでかなり内容の濃い議論が展開されました。その後、場所を移して懇親会が行われて、そこでは和やかに歓談が進みまして、互いに大いに親睦を深めたという記憶がございます。こういうことで、星様の長年にわたる霞山会の中国との文化、教育、学術交流におけるご活躍とご功績は多大なものがあるといえると思えます。

もう1人の受賞者は大城立裕様ですね。本年度27回目の受賞者ということになります。大城様もやはりご経歴の上で特に申し上げます。たいのは、大城様が戦時中の1943年に上海の東亜同文書院大学に入学されたということでございます。残念ながら終戦に直面して最終的には卒業ではなくて、中途退学ということになったようでございますけれども。

そこで学んだということも重要ですが、でも、同時にその後のことを見ますと、大城様はたくさん小説を書かれておりますが、上海での経験というものが作品にも一定の影響を及ぼしているのではないかとこのところでございます。大城様は先ほど賞状にもありましたけれども、沖繩初の芥川賞を『カクテル・パーティー』という短編小説で受賞されました。その後、数々の小説を精力的に書かれ、作品が評価され、平林たい子賞とか川端康成文学賞とか、井上靖記念文学賞等、いろいろな賞を受賞されました。私は文学方面の専門家ではなく素人でございますけれども、大城様は沖繩の文学の発展を支えた中心的な人物であるとして高い評価を受けていると理解しております。

大城様はさまざまなテーマを扱っているようにお見受けしますけれども、やはり1つは沖繩の歴史的な位置というのを強く意識されていることです。沖繩が日本の中にありながらも、日本の中で特別な、差別されたような位置にあるという意識。これは琉球処分

という歴史、また、戦後のアメリカ統治下で日本本土から分離された歴史、そして現在進んでおります普天間の基地の問題等々。そういう沖繩の歴史的な歩みを意識しつつ、精神的には沖繩の人々のアイデンティティーが何なのかということ。おそらく基本的には日本人に同化をしようとして努力したにも関わらずやはり違うところがあるということ、沖繩人としてのアイデンティティーと言いますか、そういうものを意識して、その両者の間で自らの立ち位置をいかに見つけていくかということ、こうしたことに沖繩の人々は苦悩し、葛藤してきた経験を意識されて大城様はそれを文学作品の上で表現されたというふうには私は理解しております。

愛知大学との関係で一言申し上げますと、2013年に愛知大学の東亜同文書院大学記念センターが沖繩におきまして東亜同文書院に関する展示会及び講演会を開催しました。その時に大城様にご講演をいただきました。ご講演のテーマは「私と東亜同文書院」で、若き日の東亜同文書院でのご体験を振り返っている語られ、多くの聴衆の方々に感銘を与えたと聞いております。こういうことも含めまして長年にわたって沖繩の文化、文学の方面で大いに活躍された大城様のご業績、ご活躍は東亜同文書院記念基金会の受賞に十分値するということだと思っております。残念ながら大城様は昨年の10月にお亡くなりになりました。謹んでご冥福をお祈

り致します。本来ならば大城様ご自身にお渡しできればとの願いもありますが、叶いません。生前の大城様の立派なご功績に対して賞状を差し上げたいということでございます。以上、私の挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございます。

〔記念賞祝辞〕

小野 邦久 氏（霞山会理事長）

ただ今、ご紹介を賜りました霞山会の理事長をいたしております小野でございます。

本日は東亜同文書院記念基金会の第26回と27回の授賞式をまとめて開催をしていただきました。安全面や衛生面を十分にご検討された上でこのように対面で授賞式が行うことができるということは大変良かったと思います。これは川井会長をはじめ、事務局の方々のご努力、ご尽力のおかげだと思つて



おります。厚く御礼を申し上げます。

さて、今日受賞の榮に浴されましたおふたりの先生方、星さんと大城さんでございますけれど、おふたりは大変長い間、東亜同文書院、あるいは霞山会の発展に尽力をしてこられた方でございます。第26回の受賞者である星さんは、本当に長い間中国と関わりを持って来られました。

お生まれは中国の大連で16歳の時に日本に来られました。勤めの時代も総合商社で中国のご担当、責任者ということでございますので、戦中、戦後の中国の経済社会を身をもって体験された貴重な存在だと思います。商社を退職された後は霞山会にきていただきました。

霞山会でおこなっている文化交流事業の基本は人と人との結びつきであり、人と人との交流ですが、この点を踏まえて大変なご尽力をいただきました。

また、霞山会が運営している東亜学院という語学学校がございますが、その日本語学校・中国語学校の草創期からずっと、いわば手作りです学校の着実な発展に尽くされ、そこで学ぶ学生たちの成長を見守って来られました。

星さんが奥様とおふたりのお嬢様のために書かれた「私の中国物語」という小さな冊子がございます。私はこれを読ませていただき、非常に感銘を受けました。過去のものが薄れ、風化するということも大事なことでござ

いますけれども、戦争の惨禍というものを忘れることのないように、この小さな冊子ももう一度この世に出ることも必要ではないかとさえ思っているところでございます。

星さんの中国の経済社会における貴重なご体験に裏打ちされたひとつひとつの言葉、行動、色々なお考え方というものが今の我々にとっては大事な教訓であり教えであったわけでございます。

そのような点で星さんは霞山会にかけがえのない貢献をされ、多大なご尽力をいただいた方だと思っております。改めまして心から敬意を表すると共にお祝い申し上げます。

さて、第27回の受賞者の大城先生は1943年に東亜同文書院の予科に入られたということです。終戦の時にはたしか、学生であったとお聞きしております。東亜同文書院の戦後処理を大変なご苦勞を持っておやりになりました。

故郷の沖繩は、戦争で筆舌に尽くしがたい大変な惨禍を受けました。久しぶりに沖繩に帰ってこられ、現状を目の当たりにした時、あまりにも情勢、状況が変わっていたため、非常に大きなショックを受けられたと聞いております。それがおそらくは大城先生のその後のご活躍の契機になっているのではないかと思います。それ以降、沖繩の戦後復興のために大変なご尽力をされます。同時に数多くの小説、戯曲、評論、エッセイを書かれ

ます。私も昭和44年当時、役所におりましたが、丁度沖繩の返還準備の時期でございました。沖繩に関係者を派遣するためのさまざまな準備、復興のための準備を省をあげてやっております。丁度その時におそらく大城先生は琉球、その後の沖繩県庁で返還、復興のため頑張っておられたのではないのでしょうか。何と言っても戦後の沖繩の文学、芸術、研究活動のリーダーで、その意味で本当に沖繩にとっかけがえのない方であったのだと思います。

残念ながら大城先生は去年の10月に逝去されてしまい、直接お話ができないわけでございますが、おそらくこの授賞式、そしてこの場を天国から見守っておられるのではないかと思います。

最後に星様はじめ、今日ご出席をいただきました記念基金会の皆様方のご健勝を心からお祈りをして粗辞でございますけれども、お祝いの言葉にかえさせていただきます。本当におめでとうございます。

〔星博人様 記念賞推薦の辞〕

阿部 純一 氏

(霞山会常任理事・東亜同文書院記念

基金会理事)

霞山会の常任理事をしております阿部と申します。推薦文には星博人氏と書きました



が、本人を目の前にしてそのようなよそよそしい言い方はそぐわないので星さんと呼ばせていただきます。

もうすでに表彰状の中にも、また川井学長のお言葉の中にも小野理事長の祝辞の中にも星さんの業績については触れられております。その内容につきましては、重複するところが多大にございますけれども、情報の源泉はこの推薦文でございます。集大成というところで申し上げます。

星さんは1937年（昭和12年）に中国、大連市近郊の瓦房店というところでお生まれになりました。その後、満鉄病院のお医者様だったお父上の転勤に伴いまして黒竜江省のハルピン市、鶴崗市、遼寧省、瀋陽市に郷を移しました。終戦後もお父様が中国政府に医師として流用され、星さんが中学生であった1953年（昭和28年）にご家族共々ご帰国されました。その後、1962年に東京外国語大学中国語科を卒業し、総合商社丸紅に奉職され以後、中国室長、上海支店長、北

京支店長、同社中国総代表代行などを歴任され2000年に退職されました。同じくこの年の11月に霞山会常任顧問に就任し、翌2001年の4月に常任理事に選任され、合わせて東亜学院の学院長を2013年まで兼務されておりました。2019年6月に常任理事を退任され、現在は霞山会顧問に就任されております。以上の経歴から読み取れますのは、星さんがまさに半生を中国との関わりの中で過ごされたという事実であります。中華人民共和国建国前後の政治的混乱、文化大革命下の中国を身をもって体験するにとどまらず、改革開放以降の中国の経済発展にビジネスマンとして寄与され、戦後、日中関係の発展を経済の現場から支えてこられました。丸紅を退職された後は霞山会の業務執行理事として中国との文化、学術、教育交流の発展に尽力されました。

現在、私は星さんの跡を継いで学院長をやらせていただいております。それについて申し上げますと、東亜学院のルーツは東亜同文書院の卒業生の同窓会であった滬友会が1962年に開設した東亜研修所という中国語講習会でありました。1964年に経営上の問題からこの研修所が霞山会に移譲され、そこで東亜学院と名称を改めて霞山会の事業の柱のひとつとなったわけでございます。星さんが学院長を務められた時期は東亜学院に日本語学校が開設された草創期でございますまして、学生募集のため星さん自ら何度

も中国に赴き、現地の留学生、仲介機関と接触し、それまではかばかしくなかった学生募集の実績を好転させ、日本語学校の運営を軌道にのせることができました。学術交流で星さんが寄与した特筆すべきことは2004年から2006年にかけて実施されました霞山会と上海交通大学との間で実施された研究プロジェクト「霞山会と上海交通大学の交流史、現状と今後の発展に関する学術研究」があります。当プロジェクトにおいて、星さんは霞山会を代表する立場で研究報告シンポジウムに参画し、東亜同文書院が上海交通大学の校舎を借用した事実関係を解明する上で大きな役割を果たしました。

星さんの功績を語る上でもうひとつの重要な貢献といたしましては、2010年から霞山会交流事業の柱のひとつとなっており、ます中国の遼寧、吉林、黒竜江の東北三省の3大学を代表とする「在中國日本語学習者奨学プログラム」を企画し実現させたことであります。成績優秀でありながらも経済的困難を抱える学生への奨学金支給を目的とするこの事業はそれぞれの大学から高く評価され感謝されております。東北三省は星さんが15歳で日本に帰国するまで生活していた場所でございます。いわば星さんにとって第2の故郷であります。そうした星さんの思い入れが活かされた事業であるということが言えます。星さんは少年期を中国で過ごされたこともあって完璧な日中バイリンガルでご

させていただきます。星さんからお伺いした実話をご紹介いたします。星さんのお父様が中国医科大学で教師として授業をお持ちだった時に、たまたま通訳が不在になられて急遽、星様が小學生でありながら通訳の任を務められたというのです。星さん本人はろくな通訳ができなかったとおっしゃってますけれども、その当時からお父様に期待されていた側面があったわけでございます。霞山会にとりましては中国と交流する上ではバイリンガルというのは大変強力な武器でございます。中国の人との付き合い方、中国と交渉する際に気を付けなければいけないこと、日本側としての心構え、こういった教えを請うことができただけでございます。霞山会に在職された18年間。霞山会にとつて中国との交流事業を顕著に発展させた時期でございます。その貢献は余人を持って代えがたいものがあることは言うまでもありません。

〔大城立裕様 記念賞推薦の辞〕

藤田 佳久 氏

(東亜同文書院記念基金会理事)

愛知大学名誉教授)

ただ今ご紹介いただきました愛知大学名誉教授の藤田であります。どうぞよろしくお願い致します。大城立裕先生の推薦に關しましては、私のほうで推薦文を作りましたので本日はそれを踏まえてお話しさせていただきますと思います。最近目が悪くなってきたものですから眼鏡をかけさせていただきます。

第27回、令和2年度の東亜同文書院記念基金会の受賞者として大城立裕先生を以下理由により推薦させていただきます。大城先生は1925年、大正14年沖繩県の中城村にお生まれになり、沖繩県立第二中学校をご卒業後、沖繩県の県費生として合格し、1943年、昭和18年に上海の東亜同文書院大学の1年生に44期生としてご入学されました。すでに始まつていた日中戦争が激しくなり、日米間の戦争も転換期にあたりました。それまでの書院本来の成熟期が急遽転換いたしました。大学1年半後には繰り上げ、進級や学徒動員も始まり中国語や英語の研鑽授業の他、哲学などの教養科目は凝集され学部へ入つてからの商業、貿易学などの専門科目の授業もダイジェスト風に集約されました。本格的な大旅行もできず、落ち着かない学生生活を経験しました。しかも、後半は学徒出陣で駆り出され、終戦の後には上海での戦後処理の仕事に就き、やや遅れて書院が接収された時期もその整理を体験しておられます。

翌年、1946年になつて帰国しますが、生まれ故郷、沖繩には直接戻れず、ご兄弟が

避難されておられたという熊本の阿蘇で過ごされた後、やつと沖繩へ辿り着きます。

戦争で一変した沖繩琉球を目の前にして、戦後の原点となった祖国から切断され、喪失された故郷にショックを受けました。その中でアメリカ統治下の琉球政府改革庁職員、それから高校教師を経て県庁に入り、さらに県庁の課長を務めながらも目の前に展開してきた体験を小説化することで自分の存在感を確認しようとしています。その際、その存在を問う原点になるポイントがいくつか生まれます。

1つは最初の作品である沖繩戦の中、米軍の来襲時に、ある農家の家族が主人を失いながらも自分の亀甲墓に逃げ込み、先祖にすがつて最後の生活をするというドキュメント風の『亀甲墓』というタイトルの小説です。これは土着の人々の極限の中での先祖への一体的価値観、生活観など、臨場感溢れた記録であります。そこに沖繩人が極限時に表した音声を受け取り、それがその後の先生の沖繩民族文化への関心、模索の原点になり、多くの民族文化についての優れた作品をもたらすことになったと言えます。

2つ目は、アメリカ軍支配下が続く1960年代の時期の米軍統治下の出来事作品にした『カクテル・パーティー』で沖繩初の芥川賞受賞作となりました。しかも、米軍キャンプに招かれた内地日本人、主人公の沖繩琉球人、中国人、アメリカの軍人

将校などの4人の緩やかなサロングループが会を進めている時に、米軍の子どもが行方不明になり、やがて琉球人のメイドが世話をするために連れ出していただけだったというところで一段落しますが、米軍の親はメイドを訴える事態になります。そしてその最中に、ほかの米軍人が、主人公の近所の知人である沖繩の少女を乱暴した事件が発生します。主人公は、その家の人を裁判にかけようと思いますが日米協定や犯人の米軍人出廷拒否があり、そのため弁護を頼んだサロン仲間の中国人は意外にも渋りません。この中国人が渋ったという点で、その理由を繰り返し伺うと、実は戦時中に息子が行方不明になった時に、街の中の日本軍が保護してくれた。それが分かかって大変、日本軍に好意を寄せた。しかし、帰宅したら奥さんが日本軍人に乱暴されていたという衝撃的な体験を胸に秘めていたことが分かります。そのため訴えようとしていた米軍兵士への態度に混乱が生じますが、やがてこれらの底辺に国家間の差別意識が重なり合うことも認識した主人公はアメリカ将校主催によるこの友好サロンも地元民への懐柔のためであって、まやかしだと断定するに至り、最後は主人公単独でアメリカ軍人への訴訟を決意するというストーリーであります。そこで、沖繩の置かれた状況が、アメリカからの差別意識の対象になっており、それはかつて日本が中国にも同

じ差別意識を持つていたことの構図も浮かび上がらせる。そういう作品であります。

この後が、『朝、上海に立ちつくす』という書院をめぐる作品になります。東亜同文書院の中の日本人、朝鮮人、台湾人、そして知人の中国人家族らの書院の学徒出陣をめぐるそれぞれの人物の行動や思想、諸関係の接点から、日本人をめぐる各国人の間の差別意識がその人間関係から浮かび上がってくるという状況を主人公に認識させるということになります。文中で展開する相互の議論は『カクテル・パーティー』の構図と重なっており、大城先生が実体験的世界の臨場感を時に戯曲のシナリオ方式で描いておられ、迫力に満ちております。国家、民族間の差別意識の根源への問いは『カクテル・パーティー』と共に、大城先生が極限的な国家関係の中に巻き込まれた東亜同文書院の中で苦悩した体験をベースに、まさに国際関係に翻弄される沖繩の現実を相対化して見せる新しい目を体現させたと言えます。

3つ目は、沖繩琉球の歴史問題への探求の取り組みです。多くの歴史的対象について知識を駆使し、文字としてアプローチする点是非常に独創的だと言えます。それは戦争で破壊された沖繩琉球の戦後復興を目指すためのアイデンティティーを求め、知らしめる探求の旅だったように思われます。その中で最も力作であったのが『琉球処分』の作品で

す。明治政府の日本が、軍と警察によって行った武器を持たない琉球王国への本格的侵入により破滅させたプロセスを、残された記録から解明したものです。こうして琉球王国が日本の他県レベルと同様に沖繩県として県レベルに位置づけられたその前の歴史、前身には、江戸初期に薩摩藩がやはり武器を持たなかった当時の貿易立国の琉球王国を攻め、自分の藩の植民地とし、琉球の貿易や特産品の富に対して激しい収奪を行い、琉球全体を貧困化させたという歴史があったことを示しております。それは明治の琉球処分もまた、歴史の繰り返しの始まりであったことを明解に示しております。このような日本国政府の琉球処分意識は、琉球を対等として扱わない差別意識から生まれたもので、それは戦時中の沖繩戦の沖繩を日本本土の盾として扱い、多くの沖繩人を信用せず、戦闘以前からその最中にかけて、多くの沖繩人の犠牲者を出したことも表れております。さらに1972年に日本へ沖繩が復帰した後も米軍基地の沖繩配置で、またもや琉球処分が日本政府の手で行われてるといふ認識を示されておられます。

その他、多くの歴史的対象については、大城先生は沖繩琉球の風土、環境、景観、民族文化も取り上げ、それらの沖繩琉球人の関わりを深く丁寧に愛情を持って描いておられます。これらの作品にも、帰国した目の前に展開していた沖繩琉球の荒れ果てた国土を



少しでも復興、回復させようとする先生の強い志が伝わってきます。

4つ目は、文化とそれを支える芸能の歴史的復活を実践してきたことです。この前焼けてしまいましたけど、かつて首里城の正面で国外からやってきた客人を舞と楽器、劇でもてなした組踊というのがありました。この組踊の復元。それも先生の代表的な成果であります。大城先生はそのためにも数多くのシナリオを書かれ、自分はもちろん、東京まで出てこられて上演されております。

ということで、以上のように大城先生の文学は、沖縄の戦後の復活へのご自身の大きなプロジェクトに沿うかたちで実践的に成果を上げ、沖縄琉球の全体像に関わる総合的な文化活動にまで発展させてきました。その作品は芥川賞だけでなく、先ほどもありました平林たい子文学賞、井上靖記念文化賞、紀伊國屋演劇賞特別賞、日本演劇協会演劇功労者表彰、川端康成文学賞なども次々に受賞されました。それらの功績により、国からは紫綬

褒章を1990年、勲四等旭日小紋章を1996年、それから地元では県功労賞、それから同じく新聞社の琉球新報賞なども受賞された他、県立博物館長などの役職も務められた地域文化に大きく貢献されました。その点では大城先生は戦後以降、沖縄琉球の文化を今日の文化レベルへと発展させた最大の功労者であり、継承者としてのリーダーであり、最高の実践する文化人でありました。それは沖縄の人々からも知の巨人だとして、あるいはその実践者として絶大な支持を集めました。

ところで、愛知大学東亜同文書院大学記念センターが毎年ずつと続けているのですが、東亜同文書院のことを知っていたかどうかというところで展示と講演会も各地でやっているんですね。そのうちの2013年に沖縄で実施することを決定しまして、那覇市で開催したことがございました。その時に「私と東亜同文書院」というテーマで講演をいただきました。その交渉はちよつと大変でした。その前に喉を痛めたとおっしゃっておられて、ここ5、6年講演をしたことがないと言われたんです。これはえらいことだなと思っただけですけど、私も大城先生が講演していただかないと、沖縄の方々が集まってくれないんじゃないかというわけで、繰り返し飛行機で大城先生のお宅でお邪魔したことがございます。そうしたら何とかやってみようかというところで了解をいただけたわけでありました。

当初、60分ぐらいといっておられましたけれども、倍ぐらいの時間をとっていただきました。久しぶりの講演で多くの聴衆が集まっていた。中国語に励んだ日々、軍の命令での1週間程の農村での食料調達、戦後の上海での通訳の仕事、書院や愛知大学についての多くのお話を頂きました。沢山の質問にもお答え頂き盛況でありました。この講演をきっかけに先生の喉が治ったんじゃないかなと思うぐらい、再び沖縄琉球の伝統芸能保存の啓蒙活動に力を注がれました。その熱意とお仕事は以後もずつと続いたようであります。私の頭の中ではずつとお元気なイメージがありました。

以上の点から、大城先生の書院大学末期時代の上海での諸体験が、その後の作家生活の展開の原点になったということがと言えます。その点で書院という舞台が、国際的な諸関係の中での沖縄琉球の歴史の文化的視点を含めて解き明かしていく鍵とエネルギーを大城先生に与えたんじゃないかというふうに考えられるわけです。そこに大城先生の書院との強い繋がりを改めて生み出すことができます。

ここで最後に大城先生は昨年10月27日に残念ながら亡くなされましたことをご報告させていただきます。95歳でありました。突然の訃報として我々受け取ったもんですから、非常にびっくり致しました。大変ショックでありました。もつと多くのお話を伺いた

かったということをおもいますと、大変残念でなりません。そういう点では今回の受賞ももつと早くすべきでした。これも痛烈に反省しております。改めて先生の生前の偉大なるご功績を称えさせていただきます、ご冥福をお祈りしながら東亜同文書院記念基金会からの受賞者とさせていただきます。以上であります。

〔第26回受賞挨拶〕

星 博人 氏

この度は東亜同文書院記念基金賞という大変榮譽ある賞をいただき、誠にありがとうございます。愛知大学の学長先生はじめ、関係者の方々、ご推薦いただきました皆様にはこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。既に皆さんご存知かと思いますが、私は1937年中国の大連に生まれて1953年に帰国し、1962年に東京外国語大学中国語



科を卒業いたしました。その後、総合商社丸紅の上海支店長、北京支店長など、凡そ半生を中国との関わりの中で過ごしてまいりました。

2000年からは霞山会に勤務してまいりましたが、霞山会では主に中国との文化・教育交を中心、また東亜学院では学院長として日本語、中国語の語学教育に携わってまいりました。日本語・中国語学校というものはその時代の日中関係の影響を大きく受けますが、東亜学院も例外ではありませんでした。東亜学院在任中は中国に赴いて直接日本語学校の学生募集をおこないました。その結果、次第に学生数が増え、日本語学校の運営を軌道に乗せることができました。これは中国側関係者、関係機関はもちろんのこと、折衝に応じてくれた中国側仲介機関の協力も大変大きなものでした。

一方、中国東北三省の三大学との日本語学習者奨学プログラムでは、経済的に困窮しながらもなお成績優秀な学生たちを支援する奨学制度を立ち上げ、大学在学中の4年間奨学金を支給して勉学に励んでもらい、卒業時には日本へ招いて実際に日本文化に触れ、日本を知ってもらうという目的のために実施してまいりました。次代を背負う若者の交流は日中関係がいかなる場合にも途絶えさせたいけないという理念のもと、日中双方の文化・教育交流を継続してまいりました。さらに2004年から3年間にわたり、当

会と上海交通大学との間で実施された研究プロジェクト「霞山会と上海交通大学の交流史、現状と今後の発展趨勢に関する学術研究」がございますが、これは愛知大学の全面的なご協力を得て、戦時中に東亜同文書院が上海交通大学の校舎を借用した事実関係を解明したという点において大きな成果を上げることができました。

このプロジェクトに関しましては、愛知大学の先生方並びに関係者の皆様のご協力とご尽力、またさらに上海交通大学の先生方との信頼関係なくしては成し得なかつたものとあらためて感謝しております。

本日この栄に浴せたのも、このような皆様の多大なるご協力の賜物であると感謝の念を深くしている次第でございます。本当にありがとうございます。



第26回記念賞授与の様子

〔第27回受賞挨拶〕

(故)大城立裕様のご次男

大城幹夫氏

ただ今紹介にありました大城立裕の次男の大城幹夫です。本日は、父にこのような賞をいただきましてどうもありがとうございます。父も喜んでいらっしゃると思っております。

父について何か話して下さいとお話があったんですけども、父は県庁に勤めながら執筆活動をやっていたので、県庁で定年まで勤めてましたんで、執筆活動をするのは、勤めから帰って来てからとか、休みの日でした。家にいると、ほとんど机に向かっていてというふうな状態で、たまに見たいテレビがあるのと、部屋から出てくるとか、そういう感じでした。

僕らに対しても、「やたらと注意をしてくる」とか「声を荒げて怒られる」というような経験はありません。何か注意されるといってもほとんど覚えがないというか、何か言われる時でもすべて理詰めで静かに話して行くので、こちらとしては言い返し方がないので「はい、そうですか」で終わるような感じでした。

子どもから父を見ると「常に何か考えごとをしている人」で、道を歩いていてもほとんど周りを見ているわけではなくて、ずっと

頭の中で何か考えごとをしていました。子どもの頃に自宅の近所で父の姿を見つけた時、私が見つけた時にはすでに父がこちらのほうを見ていたんで、すでに見つけられているもんだと思っていたら、そのまま横を素通りされたりすることがありました。これは私の兄も「そういうことがあるんだ」ということを言っていました。ほとんど見ることに關しては自分の進んで歩くのに障害になるかどうかぐらいしか見てなくて、あとはほとんど頭の中で考えることにエネルギーを使っているような父でした。

仕事の内容に關しては、私たちに何か話してくるようなことはなくて、本が出来たら読めるんですけども、多分、何かあれば中を読めば父の考えが分かるというつもりだったんだと思います。基本的に父は自分の頭の中で考えていることが、自分は「こうやろう」と思ってたんだから「こうできているはずだ」ということだと思います。父の記憶の中には、やろうと思ってたという記憶しなく、実際ちよつと手が滑っていたということがあったとしても、その記憶はほとんどなくて、何で上手くいかなかったんだろうということを言われることがよくありました。ですから、ほとんど自分の頭の中のことでいいばい生きていくというふうな父でした。同文書院や同文書院以外でも、そのあとの学徒出陣をして兵隊に行った中国のことについてのもほとんどあんまり聞いてなくて、

本に書かれたことを、たまに「ぼそつ」としやべるようなことしか覚えていません。とにかくいつもいつも頭の中で考えてて、ずっと考えながら行動しているので「頭の中で生きている人だ」というふうな家族では言っていました。

ちよつと、とりとめのない話になってしまってるんですけども、父についてとなると「常に考えている人」ということになりま。とりとえず父については以上です。

この度はほんとにこのような賞をいただき、本当にありがとうございます。以上でちよつとまとまりがないんですけども、私のお話とさせていただきます。ありがとうございます。



【Zoom 参加の様子】
(故)大城立裕様のご次男
大城 幹夫 氏

東亜同文書院記念基金会 記念賞・功労賞・奨励賞のこれまでの受賞者

第1回 平5(1993)年度 記念賞	平成5(1993)年11月5日 上海交通大学 中日科技研究会(翁史烈(当時の上海交通大学学長)が会長) 科学技術及び教育に関する日本の資料を中国の学生向けに刊行するなど日本事情を中国に紹介する活動を行っている。(東亜同文書院大学45期専門部卒業生吉川信夫氏は私財を投じて同会を支援した。)
記念賞	谷 光隆氏(元愛知大学教授) 大旅行調査を研究 大運河調査報告書を刊行。
記念賞	菅野俊作氏(東北大学名誉教授 41期) 中国人留学生を支援。
第2回 平6(1994)年度 記念賞	平成6(1994)年9月16日 林文月氏(台湾大学名誉教授) 源氏物語他を中国語に翻訳刊行。
記念賞	栗田尚弥氏(埼玉大学講師) 「東亜同文書院 日中を架けんとした男たち」を刊行。
記念賞	白川正雄氏(42期) 戦後スマトラに永住し戦火で消失したモスクを再建。
記念賞	村上和夫氏(長野県中国文化研究会副会長) 中国古代瓦当文様の研究を刊行。
第3回 平7(1995)年度 記念賞	平成7(1995)年9月13日 藤田佳久氏(愛知大学教授) 大旅行調査報告書を解説し「中国を歩く」等を刊行。
第4回 平8(1996)年度 記念賞	平成8(1996)年9月6日 ダグラス・レイノルズ氏(ジョージア州立大学歴史学部副教授(注:肩書きは受賞当時)) 東亜同文書院の大旅行調査を研究し、それが戦後米国で発展した地域研究(Area studies)よりも古い歴史を持つ優れたものであることを検証し「地域研究の知られざる起源日本の東亜同文書院」を刊行して広く世に紹介した。
記念賞	陳 弘氏(44期) 日中要人の会談の通訳 人民日報東京特派員として友好促進に貢献。
第5回 平9(1997)年度 記念賞	平成9(1997)年10月7日 遠山正瑛氏(鳥取大学名誉教授) 日本砂漠緑化実践協会の設立ボランティアを指導し内蒙古砂漠に植林。
第6回 平10(1998)年度 研究奨励賞	平成10(1998)年9月24日 薄井由氏(上海復旦大学修士課程) 「東亜同文書院大旅行初歩研究」を中国で出版予定書院の業績を中国で紹介。
研究奨励賞	水谷尚子氏(日本女子大博士課程) 書院中華学生部を研究し論文「東亜同文書院に学んだ中国人」で同学生部の業績を紹介。

第7回 平11(1999)年度 記念賞	平成11(1999)年9月28日 翟新(テキシン)氏(上海復旦大学大学院修士課程修了 慶應義塾大学大学院法学 研究科後期博士課程) 東亜同文化の日中近代史における足跡を研究、再評価する論文を発表。
研究奨励賞	劉 永誌氏(愛知大学大学院文学研究科博士後期修士課程 博士学位取得) タクラマカン砂漠の困難な現地調査を行い、その日本語論文は辺境の地誌学的 研究として高く評価された。
第8回 平12(2000)年度	平成12(2000)年9月29日 名古屋テレビ「青春の中国」取材班 東亜同文書院の「日中の架け橋を」という理想に生きた書院生の青春とそれを 現代に受け継ぐ愛大学生の姿を生き生きとテレビで紹介。
第9回 平14(2002)年度	平成14(2002)9月26日 西所正道氏 「上海東亜同文書院風雲録」を刊行。卒業生たちの足跡を追うことにより、東亜 同文書院の建学の精神が世紀を越えて現代に生き続ける姿を広く世に紹介。
第10回 平15(2003)年度 記念賞	平成15(2003)年9月24日 工藤俊一氏(元北京大学文教専門家) 「北京大学 超エリートたちの日本論—衝撃の「歴史認識」」を刊行。各方面から 高い評価を得た。
第11回 平16(2004)年度 記念賞	平成16(2004)年9月29日 今泉潤太郎氏(愛知大学名誉教授) 「愛知大学『中日大辞典』」の編纂に長年献身的に力を注ぎ、同辞典の内外にお ける高い評価の形成に多大の寄与をした。
第12回 平17(2005)年度 記念賞	平成17(2005)年10月7日 大森和夫氏(国際交流研究所長)・弘子さん夫妻 日本語教材を中国の大学に寄贈するなど日中文化交流活動を続けた。
第13回 平18(2006)年度 記念賞	平成18(2006)年12月8日 テレビ宮崎 強制連行で過酷な労働を強いられた中国人労働者を親身にかばった勇気ある日 本の青年の精神と行動力のルーツを辿るヒューマンドキュメンタリーを制作放送 した。
奨励賞	成瀬さよ子氏(愛知大学豊橋図書館司書) 内外のぼうだいな資料を収集整理し貴重な「東亜同文書院関係目録」を作成刊 行した。
第14回 平19(2007)年度 記念賞	平成20(2008)年1月29日 浅川義基氏 北京国際元老テニス大会に連続20年間出場する中で、会の推進的役割を果た し、日中友好と国際親善のために尽力した。

<p>第 15 回 平 20(2008)年度 記念賞</p>	<p>平成 21(2009)年 1 月 30 日 工藤美代子氏 著書「われ巢鴨に出頭せず」において文麿公の行動を論理的に検証したが、これは東京裁判史観を根底から覆す程の功績があった。</p>
<p>第 16 回 平 21(2009)年度 記念賞</p>	<p>平成 22(2010)年 1 月 27 日 葉敦平氏（上海交通大学校史研究室教授） 東亜同文書院の上海交通大学キャンパスの占用、両校の近隣同士の友好関係などを、史実に基づき組織的に研究し、「資料選集」を編集。</p>
<p>第 17 回 平 22(2010)年度 記念賞</p>	<p>平成 23 年(2011)年 1 月 26 日 小坂文乃氏 著書「革命をプロデュースした日本人」で、孫文に対し多大の援助を与えながら「一切口外シテハナラズ」として革命運動の隠れた援助者であった梅屋庄吉の生涯を明らかにした。</p>
<p>記念賞</p>	<p>愛知大学中日大辞典編纂所 鈴木擇郎先生らにより計画された東亜同文書院中国語教育のシンボルともいべき辞典編纂に長年取り組み中日大辞典第三版を刊行。</p>
<p>第 18 回 平 23(2011)年度 功労賞</p>	<p>平成 24 年(2012)年 1 月 24 日 藤田佳久氏（愛知大学名誉教授、愛知大学東亜同文書院大学記念センター初代センター長） オープン・リサーチ・センター事業実施。東京・中日・北陸中日新聞連載「東亜同文書院の群像」執筆。</p>
<p>奨励賞</p>	<p>武井義和氏（愛知大学東亜同文書院大学記念センター研究員） 「孫文を支えた日本人」出版。「中国における東亜同文書院の『資料選集』」翻訳。</p>
<p>第 19 回 平 24(2012)年度 奨励賞</p>	<p>平成 25 年(2013)年 1 月 25 日 保坂治朗氏 それまで東京同文書院の実態が幻的存在であったのを実像化した点で先駆的であり、当記念センターの書院研究で当初からなかなかアプローチ出来なかった空白部分を埋め、時代背景にも言及されつつ東亜同文書院のある種原点を解明された。</p>
<p>奨励賞</p>	<p>有森茂生氏 東亜同文書院関係の図書、資料文書、写真、レコードなどを 2008 年以來ほぼ毎年のように寄贈され、愛知大学東亜同文書院大学記念センターの展示や研究に貢献された。</p>
<p>第 20 回 平 25(2013)年度 記念賞</p>	<p>平成 26 年(2014)年 1 月 28 日 岡部達味氏（東京都立大学名誉教授、霞山会元理事） 中国政治・中国外交を専門とした学術研究に加え、メディアを通じて我が国論壇としてリードする役割を果たされた。1997～2001 年には日中友好 21 世紀委員会日本側座長を務められ、日中間の相互理解促進に大きく寄与された。</p>

<p>第 20 回 平 25 (2013) 年度 功勞賞</p>	<p>平井誠二氏 (公益財団法人 大倉精神文化研究所 研究部長)</p> <p>東亜同文書院卒 3 期生大倉 (旧姓江原) 邦彦氏が戦前設立した大倉精神文化研究所の研究員として、同研究所の研究活動を企画運営されている。東亜同文書院関係にも強い関心を持ち、多くの史資料収集を行なうとともに、機関誌『大倉山論集』に多くの研究者を動員して、その成果を集積されている。</p>
<p>第 21 回 平 26 (2014) 年度 記念賞</p>	<p>平成 27 年 (2015) 年 1 月 27 日</p> <p>北川文章氏 (霞山会顧問、霞山会元理事長、山一証券元副社長)</p> <p>日中間の文化交流事業、留学生交流事業、日中間の相互理解の推進に尽力されたことにより、中国上海交通大学及び浙江大学より顧問教授に任命されるとともに、揚州大学より名誉教授の称号を授与された。霞山会理事長就任時には愛知大学理事も兼任され、史実に基づいた「上海交通大学と財団法人霞山会の歴史関係に関する共同研究」に尽力されるなど、国際研究交流事業推進に多大な貢献をなされた。</p>
<p>功勞賞</p>	<p>仁木賢司氏 (ミシガン大学上級ライブラリアン)</p> <p>東亜同文書院関係の文献資料を精力的に収集し、ミシガン大学等の研究者へその提供および指導をされ、アメリカにおける東亜同文書院研究のベースをつくられた。2009 年には「ミシガン大学の東亜同文書院およびアジア系文献史資料のデジタル化」、2014 年には「書院との出会いと史資料」と題して愛知大学で講演され、東亜同文書院大学記念センター発展への期待を力説された。</p>
<p>第 22 回 平 27 (2015) 年度 記念賞</p>	<p>平成 28 年 (2016) 年 1 月 22 日</p> <p>小崎昌業氏 (東亜同文書院大学第 42 期、愛知大学第 1 期、在モンゴル特命全権元大使、在ルーマニア特命全権元大使)</p> <p>東亜同文書院大学の第 42 期生並びに愛知大学 (旧制) の第 1 期生として、歴史的に関わりが深いこれら 2 つの大学の発展のために、一般財団法人霞山会を理事、また顧問として、同時に、学校法人愛知大学の監事も務められるなど、生涯を懸けてご尽力されてこられた。</p> <p>また、外交官としてのご活躍、東亜同文会の昭和期の諸活動の取りまとめ、愛知大学に引き継がれた現地主義教育へのご指導など、実質を伴ったご功績を残してこられた。</p>
<p>第 23 回 平 28 (2016) 年度 功勞賞</p>	<p>平成 29 年 (2017) 年 2 月 1 日</p> <p>村上武氏 (回光会・東光書院院長)</p> <p>東亜同文書院 18 期生で、中華学生部の教員を務められた父、村上徳太郎氏の御子息。父は、東亜同文書院の生みの親である荒尾精、近衛篤磨、根津一の三先覚 (聖人) を祀った靖重神社のご神体を帰国後ご自宅 (埼玉県) に東光書院を興して祭られた。武氏は、父を継承しご神体を祀られてきた。</p> <p>あわせて、荒尾精が志した中国、東アジアとの共同、および実践の精神を評価し、著書や伝記を復刻したほかそれをふまえ、評論紙「回光」を月刊にて発刊し、啓蒙活動を進め、2015 年には、『日清戦勝異論』を刊行し、荒尾精を顕彰する諸活動に尽力なされた。</p>

<p>第24回 平29(2017)年度 記念賞</p>	<p>平成30年(2018)年3月28日 山田正氏(霞山会元理事長、愛知大学元理事)</p> <p>一般財団法人霞山会の理事(2006~2015年)、筆頭常任理事(2007年)、理事長(2008~2014年)をつとめられ、文化・教育、学術・研究交流分野の発展に尽力され数々の業績を残された。また、2008年4月より愛知大学理事に就任され、当会と愛知大学の繋がりをより緊密にされた。</p> <p>霞山会の広報誌『Think Asia』を創刊し、アジア諸国・地域の社会、歴史、文化に関する情報の提供に尽力され、学術・研究交流では、上海交通大学および上海市日本研究交流協会、北京の中国国際交流協会、中国教育国際交流協会等各機関との研究者の相互交換、共同研究、シンポジウムなどをおこない学術研究交流の活性化をはかられた。</p>
<p>第25回 平30(2018)年度 功労賞</p>	<p>平成31年(2019)年3月6日 中島寛司氏(愛知大学同窓会元神奈川支部長)</p> <p>愛知大学同窓会のリーダーとして滬友会、霞山会、愛知大学が主催する多岐にわたる行事にかかわり、東亜同文書院卒業生と愛知大学関係者とのつなぎ役を担われるなど、人望と行動力は第一人者である。</p>
<p>第26回 令元(2019)年度 記念賞</p>	<p>令和3年(2021)年3月10日 星 博人氏(東亜学院元院長)</p> <p>総合商社丸紅を退職後、霞山会常任顧問に就任。翌年から東亜学院長を兼務し18年間中国との文化・学術・教育交流の発展に尽力された。また「霞山会と上海交通大学の交流史、現状と今後の発展趨勢に関する学術研究」の参画者として東亜同文書院が上海交通大学を借用した事実関係を解明するなど大きな成果を上げられた。</p>
<p>第27回 令2(2020)年度 記念賞</p>	<p>令和3年(2021)年3月10日 大城立裕氏(予科44期)</p> <p>動乱の戦時下、学徒出陣を体験。沖縄帰郷後は仕事の傍ら、それまでの経験を踏まえた数々の小説を発表。「芥川賞」「平林たいこ文学賞」など多数受賞。国からは、1990年 紫綬褒章、1966年 勲四等旭日小綬章を受賞された。沖縄の人々からも「知の巨人」として絶大な支持を集め、沖縄琉球文化の発展などに偉大な功績を残された。</p>



授賞式参加ご芳名(敬称略、順不同)

星 博人 川井伸一 小野邦久 藤田佳久 阿部純一 三好 章 近藤智彦 阿部 光 田沼敏子 関谷賢三 平井誠二
高井和伸 村尾竹一 中川善弘 伊藤登美夫 杉浦福夫 小川 悟 中山 弘 六鹿茂夫 柴田 孝倉持由美子
齋藤真苗 千葉憲一 古月雅之 堀田幸裕 垂井 進 水野紘治 嵯峨 隆 クリストファー・スピルマン 柴田智也
会田正彦 梅村博文 夏目益良 小川晃史 伊藤綾子

[Zoom 参加] 大城幹夫 岡村勘吉 成瀬さよ子 中島寛司 藤田哲男 秋岡家栄 淀野敏男 岩間 毅 日笠羽司名
大滝則忠 畑野 勇

東亜同文書院記念基金特別奨励賞 東亜同文書院記念基金栄誉賞 授与

東亜同文書院記念基金会では、書院への理解を深め、伝統を引き継いでいくことを期待して本学学生へ2種類の表彰をしております。1999年度より「東亜同文書院記念基金栄誉賞」を設け、学位記授与式において、人物・学業成績が優れた者を表彰しています。

また、2013年度より「東亜同文書院記念基金特別奨励賞」を設け、入学式において入学試験の成績が最も優秀な入学者に対して、同賞を贈っております。

東亜同文書院記念基金 特別奨励賞 東亜同文書院記念基金 栄誉賞

【2019年度受賞者】

法学部 小澤 侑生
地域政策学部 鈴木 凱也

【2019年度受賞者】

経営学部 市川 来実
地域政策学部 鈴木 惟槻

【2020年度受賞者】

法学部 安藤 脩人
経営学部 塚田 冬哉
文学部 稲垣 徳晃

【2020年度受賞者】

現代中国学部 浅井 阜
地域政策学部 長谷川 智子



基金会役員名簿

会長

川井 伸一
(愛知大学理事長・学長)

副会長

小野 邦久
(霞山会理事長)

理事

藤田 佳久
(愛知大学名誉教授)

阿部 純一
(霞山会常任理事)

三好 章

(愛知大学東亜同文書院大学
記念センター長)

近藤 智彦

(愛知大学事務局長)

監事

岡村 幹吉
(岡村会計事務所)



本間先生欽慕の会

令和元年5月12日(日) 東京小平霊園

写真お名前(敬称略)

- | | |
|--------|------|
| 本間正久 | 中島寛司 |
| 高井和伸 | 高橋光子 |
| 殿岡晟子 | 小川悟 |
| 本間万里子 | |
| 村尾竹一 | 谷口優 |
| 藤田佳久 | |
| 岩間毅 | |
| 鳥越剛 | 川井伸一 |
| 岩城龍夫 | 夏目益良 |
| 伊藤登美夫 | |
| 荒尾初雄 | 小川千尋 |
| 中山弘 | |
| 中川善弘 | 杉浦福夫 |
| 有森茂生 | |
| 荒尾初雄夫人 | |
| 守能伸幸 | |

令和元年、五月晴れのもと、今年も小平霊園の墓前に本間家、同窓会合わせて25名が参集墓参。その後、恒例の「橙屋小平駅前店」で直会。『本間喜一顕彰会活動報告』と東愛知新聞「昭和・平成から令和へ向けて」特集記事(※1)の配布と説明などがありました。また、殿岡晟子様から頂戴しました20年物の紹興酒は美味であり、終始和やかな雰囲気滞りなく進められました。



根津山洲先生墓参 桜花忌
平成31年4月6日(土) 横浜の鶴見総持

参加者：星原大輔 熊谷範一郎 平井誠二 藤田佳久 堀田幸裕 鳥越 剛 高井和伸 中島寛司 [敬称略]



荒尾東方斎先生墓参
令和元年10月26日(土) 東京谷中の全生庵

参加者：堀田幸裕 鳥越 剛 中島寛司 田辺勝巳 星原大輔 小川千尋 小川悟 杉浦福夫 [敬称略]

基金会ニュース(第21・22合併号)の発行にあたって

2019年12月に突如発生した新型コロナウイルス感染症は、瞬く間にその猛威を振り、パンデミックと言われる世界的な流行となっていきました。

緊急事態制限下で、感染拡大を抑制するための外出、移動、催物開催、施設使用など様々な制限が発動され、企業等ではテレワークの導入による働き方改革、大学ではオンライン授業の導入が進み、ヒトやモノの動きを急激に停滞させてきました。

第26・27回東亜同文書院記念基金会授賞式(2021年3月開催)の開催についても開催直前まで理事会で検討を重ね、十分な感染対策とZoomによるオンライン配信併用の形をとることで実施に踏み切りました。

第26回受賞者の星博人様におかれては、授賞式を1年間順延する形となり、長い間、お待たせさせていただきました。また、第27回受賞者の大城立裕様のご次男、大城幹夫様におかれては、新型コロナウイルス感染症の不安が治まらない中での授賞式案内となり、ご心配をおかけいたしました。ここに改めてお詫び申し上げます。

今回、第26・27回授賞式が開催できたことは、星博人様、大城立裕様の長年にわたる多大なる功績について多くの関係者の皆様と称え、慰労と感謝の気持ちを伝えることができた機会となり、基金会としてのひとつの役目を果たすことができたことと安堵しております。

基金会ニュース掲載記事は、その多くが授賞式の様子を紹介となっております。2019年度に予定していた授賞式を順延したことにより、基金会ニュースの発行も順延し、今回、第21・22合併号という形で発行させていただきました。基金会ニュースを通して改めて関係者の皆様とともに二人の受賞の喜びを分かち合えたら幸いです。

この先も未だ新型コロナウイルス感染症の見通しの立たない状況にあります。

皆様くれぐれもご自愛ください。

愛知大学豊橋研究支援課長 梅村 博文

東亜同文書院大学記念 センター活動レポート

①高松展示会・講演会を開催

高松展示会・講演会「明治、大正、昭和に上海にあった日本の大学『東亜同文書院』」を令和元年10月12日(土)～10月14日(月・祝)に、J R高松駅前のサンポートホール高松にて開催しました。展示会では愛知大学記念館にあるコレクションの展示、講演会は『東亜同文書院』に係る内容を紹介しました。

講演会では、石田卓生愛知大学非常勤講師が「東亜同文書院と上海」、藤田名誉教授が「日本初のビジネススクールとして誕生し、発展した東亜同文書院」と題して講演しました。また、元田辺豊橋研究支援課長(現 豊橋研究支援課長は梅村博文氏)が、大学記念館のドローン撮影ビデオの放映と、「東亜同文書院から愛知大学」に関する紹介をいたしました。

【展示会感想】

・東亜同文書院と孫文や蒋介石との関係がある事も判って良かったです。

・東亜同文書院が展示のメインになるのは当然だが愛知大学現状と将来の展望がどうなっているか知りたい。

・母親が明治43年生まれであり、父親が昭和19年に戦死して戦後苦しみながら生きぬいてきた。今年は令和の時代となり今までの歴史を考えつつ「子供、孫達に明るい人生を」と願い、考えさせられました。ありがとうございました。

【講演会感想】

・東亜同文書院の設立から愛知大学設立に至る時代背景をグローバルな視点から説明いただき良く理解できた。

・東亜同文書院の設置(設立)目的や当時の上海の様子が理解できた。

・当時の画像も織り混ぜながら各種エピソードも分かりやすく興味深いお話を伺うことが出来た。

・戦前戦中そして戦後に亘る書院と中国との関わり、そして国内事情との関係を分かりやすく説明して下さいました。

・豊橋キャンパスの最新の映像を見て懐かしく感じます。愛知大学にこのような歴史があったことを学生の頃に知らなかったので残念です。

愛知大学 AICHI UNIVERSITY

明治、大正、昭和に上海にあった日本の大学「東亜同文書院」

高松展示会 令和元年 10月12日(土)～14日(祝)
10:00～17:00 (※14日(祝)は13:00まで)

高松講演会 令和元年 10月13日(日)

13:30～14:00 「東亜同文書院から愛知大学」ビデオ放映と、愛知大学記念館紹介
田辺勝巳(愛知大学豊橋研究支援課長)

14:00～14:45 「東亜同文書院と上海」
石田卓生(愛知大学非常勤講師、愛知大学東亜同文書院大学記念センター研究員)

15:00～16:00 「日本初のビジネススクールとして誕生し、発展した東亜同文書院」
藤田佳久(愛知大学名誉教授、愛知大学東亜同文書院大学記念センター元センター長)

16:00～16:20 質疑・応答

サンポートホール高松
1階:市民ギャラリー
コミュニケーションプラザ
〒760-0019 香川県高松市サンポート2番:号
TEL:087-825-5000(代) FAX:087-825-5049

予約不要・入場無料・入退場自由

主催:愛知大学東亜同文書院大学記念センター
TEL:0532-47-4139
後援:一般財団法人霞山会、愛知大学同窓会、
公益財団法人愛知大学教育研究支援財団



②愛知大学史シリーズ第2回 昭和30年代から平成にむけての愛知大学を語る」を開催

愛知大学史シリーズ 講演会「昭和30年代から平成にむけての愛知大学を語る」が、令和元年11月17日（日）豊橋キャンパス本館5階第3・4会議室にて開催されました。

愛知大学は1946（昭和21）年11月15日に豊橋校舎に誕生して以降、昭和、平成、令和と、時代と共に変遷しています。1988（昭和63）年と2012（平成24）年の2度におよぶ名古屋キャンパスの移転は、本学大学史のなかで特質すべき顕著な事業といえます。そこで愛知大学元理事で事務局長をされた田岡鈞郎氏に三好町（現みよし市）への移転にかかわる当時の大学情勢を中心に「愛大の変遷を振り返る〜昭和30年代から平成の時代〜」、川井理事長・学長に「愛大さしま進出とその後の変化」と題して講演をしていただきました。

■愛知大学史シリーズ

1950(昭和25)年頃の愛知大学本館(皇徳校舎)の写真

- ・陸軍軍医(陸軍司令部) (1946-1950)
- ・豊橋陸軍看護学校 (1947-1949)
- ・豊橋陸軍看護士学校 (1949-1950)
- ・愛知大学本館 (1946-1950)
- ・愛知大学記念館 (1950-)

*1998(平成10)年に、文部省により豊橋有形文化財に指定された。

名古屋校舎の変遷

名古屋校舎は、1949(昭和24)年東邦学園を借用するかたちで誕生し、1951年に旧中京女子短期大学(名古屋市東区往來町、のち東区備前二丁目)を購入し移転拡張がなされた。これにより、豊橋に追加名古屋進出の礎が築かれたのである。

1951(昭和26)年の名古屋校舎 3号館 1966(昭和41)年竣工
1995(平成7)年撮影

名古屋校舎は、1988(昭和63)年、西加茂郡三好町に新キャンパスが開校し、豊橋部を残し移転する。そして、新キャンパスを名古屋校舎と、旧名古屋校舎を豊橋(くろまみち)校舎と称することとなった。

名古屋キャンパス 1988(昭和63)年開校時

2012(平成24)年、名古屋市さしまライン地区に新キャンパスが開校し、みよし市から移転し、みよし市の名古屋キャンパスは24年間での閉校となった。

豊橋キャンパス 2004(平成16)年

愛知大学東亞同文館前大学記念センター
●二条線は公共交通機関をご利用ください。 ●豊橋鉄道東線「愛知大学前」駅下車

0532-47-4139

愛知大学記念館 検索

③ 名誉博士 平松礼二画伯特別展覧会を開催

第3回名誉博士 平松礼二画伯 特別展覧会を令和元年11月15日～23日の9日間、大学記念館2階 名誉博士記念室にて開催しました。多くの方々の観覧があり、9日間で1502名の方々の来館がありました。

今回の展覧会作品は、著名な日本画家である平松礼二画伯が自ら厳選されたものです。日本各地、東海地方、フランスジャポニズム、「文藝春秋」の表紙画など多彩な作品が展示されました。

また、特別展覧会開催期間中に「Hiramatsu à Giverny ジヴェルニー印象派美術館」ジャポニスム／印象派展から」を上映しました。



愛知大学名誉博士
第3回 **平松礼二画伯** 特別展覧会
Hiramatsu Reiji
2019年11月15日(金)～23日(土・祝) 10:00～18:00 入場無料
愛知大学 豊橋キャンパス 愛知大学記念館2階 名誉博士記念室
特別上映会 **Hiramatsu à Giverny** <交通機関> 豊橋駅より豊橋鉄道運美線「愛知大学前山駅」下車
ジヴェルニー印象派美術館「ジャポニスム／印象派」展から <お問い合わせ> 企画協広報課 TEL.052-937-6762
ホームページアドレス http://www.aichi-u.ac.jp
特別展覧会開催期間中、随時上映します。
関連「高山辰雄 平松礼二 松村公爾 文藝春秋表紙絵とその芸術」10月19日(土)～12月8日(日)
展覧会 古川美術館 ●交通機関：名古屋市内地下鉄東山線地下駅下車 ●休館日：月曜日(ただし、11月4日(月・祝祭)は開館、翌日休館)
*愛知大学学生は、学生証提示により、古川美術館 分館の優待入館券が無料となります。(休館中に限り)



【来館者の感想】

・映像があることで理解が深まり、大変良いと思います。『モネが歩いたジヴェルニー村』の赤い花を見たときに、モネの絵画を思い出しました。とても大好きな絵のひとつですが、それをまた平松先生の作品で見れたことで繋がっているように感じました。すばらしい作品の数々をゆっくり見ることができてとてもうれしかったです。

・すばらしいです。豊橋に生まれ86年この愛知大学近くに過ごしてきました。こんなまたとないすばらしい平松画伯の展覧会を身近にみられて感謝の一言です。ありがとうございます。

・とても素晴らしかったです。私が心魅かれたのは屏風作品「路・白い波の彼方へ」と「フランス屏風・春の曲」いつまでも見ていたい作品でした。また、「行く夏の夕」は絵の世界に引き込まれて行くようでしたし、「夕秋図」や「花彩富士山」「ノルマンディー野の色」の小花の描き花には、ため息しか出ませんでした。来年も期待しています。・すごく沢山の絵があって大きな絵を、子供も「すごい」と観っていたので、何か心にのこったのではないかと思っております。



愛知大学は1946年に中部地方において、初めての法文系大学として愛知県豊橋市に誕生しました。その前身は、第二次世界大戦前、海外にあった日本の高等教育機関であり、とりわけ中国の上海にあった東亜同文書院(のちに大学)が中心と言えます。

東亜同文書院大学記念センターは、1993年に設立して以来、本学の「生みの親」ともいえる東亜同文書院大学の総合的研究と、書院を継承した愛知大学の大学史研究を進めており、その成果はシンポジウムや紀要、ブックレットにて発表してきました。

文部科学省の研究プロジェクト「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」の採択後も、①「近代アジアにおける東亜同文書院および東亜同文会の展開と機能に関する研究」、②「東亜同文書院を軸とした外地からの引揚げ総合大学として創立した愛知大学とその特性に関する研究」を中心に研究を促進しています。

研究活動のほか、センターがある大学記念館には、本学の歴史やコレクションを紹介する展示室があり、「大学史」の授業にも利用しています。来館者は本学学生のほか、高校生や国内外からの研究者など、幅広い層の方々に来館いただいています。来館者の中には史資料を寄贈して下さる方もおられ、整理・保存活動も行っています。

センター事業に賛同をいただけ、東亜同文書院大学・愛知大学に関する資料等を提供いただける方は、当センターまでご連絡ください。よろしくお願いいたします。



国際シンポジウム

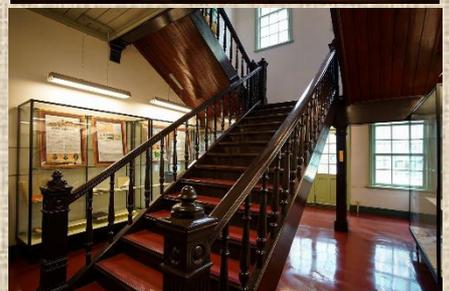
- 2016年 「東亜同文書院卒業生たちの軌跡を追う」
- 2015年 「近代日中間関係史の中のアジア主義-東亜同文書院と東亜同文会-」
- 2014年 「東亜同文書院の中国研究-その現代的意味」
- 2013年 「近代日中間関係史の中の東亜同文書院」
- 「孫文と東アジアの平和」
- 2012年 「近代台湾の経済社会変遷-日本とのかかわりをめぐって-」
- 2011年 「辛亥革命・孫文・東亜同文会」
- 2010年 「戦前外地にあった愛大ルート5校の出身学生が語るアジアと愛大」
- 2009年 「欧米研究者から見た東亜同文書院」
- 2008年 「東亜同文会の東アジアにおける教育活動とその展開」
- 2007年 「日中研究者による東亜同文書院研究」
- 「世界と日本の大学史の流れの中での東亜同文書院と愛知大学」

展示会・講演会

- | | |
|-----------|-----------|
| 2019年 高松 | 2010年 名古屋 |
| 2018年 岡崎 | 2010年 米沢 |
| 2017年 浜松 | 2010年 京都 |
| 2016年 名古屋 | 2009年 神戸 |
| 2015年 松本 | 2009年 シカゴ |
| 2014年 広島 | 2008年 福岡 |
| 2014年 岐阜 | 2008年 弘前 |
| 2013年 長崎 | 2007年 東京 |
| 2012年 沖縄 | 2006年 横浜 |
| 2011年 宮城 | |

出版物

- ・同文書院記念報 (vol.29まで刊行)
- ・ブックレット (第9巻まで刊行)
- ・愛知大学創成期の群像 など



愛知大学記念館

愛知大学東亜同文書院大学記念センター



《開館時間》月～金曜日:10時～16時 《閉館日》土・日・祝および大学の定める休日